

# こらっせ便り



2014年3月24日

## 2014年今年も「保養と学習」やります こう期待！

「福島子ども・こらっせ神奈川」代表 山際正道

「福島子ども・こらっせ神奈川」では、2014年も福島県楡葉町の生徒さんに参加していただく「保養と学習」を実施するべく計画立案中です。

この間、毎夏2年間、多くのみなさんのご理解とご協力により、「保養と学習」の企画を実施することができました。皆さんに深く深く感謝いたします。

3年経った東日本大震災は多くの傷跡を残したままです。復興に関しては現状復帰というわけにはいかない所も多くあり、加えて政府・自治体の施策計画・実施に関する様々な問題もあり、困難さが一段とあるように思われます。議論の基本で「自然と共に」との視点が不十分な気がします。今度の震災で自然を克服することなど不可能だ、自然と共に生きることこそ自然な姿と思うことではないでしょうか。長大で巨大な堤防を作ることではなく、柳と風と受け流す中で人の生きることを確保する、自然に少しだけ我慢してもらって、タワー等の設置を考えることなどもあるのではないのでしょうか。「自然と共に」です。

私たちはそんな中で、特に子どもたちの心身へのダメージを重大だと思っています。今までと大きく異なる生活環境の中で、身近な親族の不幸や見たくもない親の苦悩等、子どもらしいわがまを押し込めて生活しているのではないかと思われます。思い切って外で遊べないので体力が劣ってきているとの調査報告も出されています。時間が経過すると共に放射能の影響が子どもの体に表れ今後ますます顕在化するのではないかと危惧されています。

そんな心配の中で今年の企画で川遊びをした時の様子を忘れることができません。楡葉の子が、参加した大学生と一緒に、水辺でゲームをしたり、ずぶぬれになりながら水を掛け合ったり、川に飛び込んだり等の水遊びをしたり、みんな子どもに帰って楽しんでいました。「だいじょうぶ」と言われつつも日頃は外で遊ぶことを躊躇していたことを示していたと思えます。

秋の文化祭・ゆづり葉祭に見学に行きました。多くの生徒さんがそれぞれの役割をしっかりとこなして観客も出演者本人も楽しく充実した時を過ごしていました。参加者が皆、前途に不安を抱き、しっかりしなくてはと思いで生活している所での出し物で、その切実さが皆の共感を呼んだのではないのでしょうか。

私たちの運動は長期に渡って続けなくてはなりません。そのためには、市民の努力だけでは困難です。政治が子ども・生徒の心身の健康・成長に責任を負うとの立場から行政施策とし予算措置し「移動教室」の実現を要請してきました、その結果新年度に一定の予算が措置されることとなりました。関係のみなさんに感謝すると共に、この予算が十分な成果を上げることができるように努めなければならないと思っています。

子どもたちが心身ともに健全に発達し、自己実現を成し遂げることを期待し、可能な限りの応援をしたいものです。引き続き引き続き皆様のご支援をお願いいたします。

# 檜葉っ子をとしまく現状

事務局長 遠野はるひ

## ● 檜葉はどんな町

檜葉っ子の故郷である檜葉町（人口 7600 人）は、福島県浜通り、8 町村からなる双葉郡（人口 6 万 6400 人）に属していますが、隣接するいわき市とのつながりが密です。檜葉町はマスコミに取り上げられることは少なかったのですが、放射能で汚染された土壌などを長期保管する中間貯蔵施設を双葉町・大熊町・檜葉町に建設するという政府案が、昨年 12 月に具体化されることになり、檜葉町がにわかに脚光を浴びることになりました。帰還困難区域である双葉町・大熊町と違い、帰還の話しがもちあがっている檜葉町では町を 2 分するような反対がおきました。今年の 2 月、福島県は檜葉町には中間貯蔵施設ではなく焼却灰の処理施設を造ることを決め一件落着となったことは記憶に新しいと思います。



檜葉町は東は太平洋に臨み、西は阿武隈高地が連なる美しい町です。稲作や野菜を生産する農業、木戸川を遡上する鮭の捕獲などの漁業もおこなわれていますが、産業の中心は原発関連です。1971 年には双葉町と大熊町にまたがり福島第 1 原発が、続いて 1982 年には富岡町と檜葉町に第 2 原発が運転を開始しました。当時、第 1・第 2 原発で 1 万人が働き、この地域では 2 家族に一人は原発関係の仕事についているといわれていました。迷惑施設である原発を立地する自治体に国から支払われる電源三法交付金と原発関係企業からの税金で、原発立地自治体である双葉・大熊・富岡・檜葉は、福島の他の自治体に比較すると財政が豊かで、1 世帯当たりの所得も高かったようです。

## ● 3.11 で激変した生活

3 月 11 日、震度 6 強の地震が檜葉を襲いました。最大 15 メートルの津波で沿岸にあった 50 戸の家屋が流され、13 人が命を奪われました。震災関連死は高齢者を中心に 95 人を数えています。11 日当日、地震・津波で被災した 1500 人は町内の 4 ヶ所の避難所にいましたが、12 日の午前 2 時に東電からの「原発がおかしい」という情報で、町は早朝から 5800 人の町民をいわき市へ急遽移動することを決め、夕方までにいわき市の学校体育館など 7 ヶ所の避難所に分かれて避難させました。さらに、16 日からはこのうちの 1100 人が姉妹都市の会津美里町に移り、避難生活をおくることとなります。檜葉町役場もいわきから会津美里に、そして 2012 年 1 月に現在のいわき明星大学の学生会館へと転々となりました。

福島第 1 原発から 10-20 キロの範囲内にある檜葉町は、警戒区域に指定され立ち入りが禁止されたので、地震の片付けもできないままに自宅を離れ、避難所暮らしをすることになりました。3・11 当日、下校前だった檜葉っ子たちはランドセルなどの私物をすべて学校に放置したまま避難。放射能の測定後に私物を持ち出せたのは、小学生は 2012 年 9 月、中学生は 2013 年 3 月でした。

避難所から急ピッチで建設された仮設住宅、雇用促進住宅、借り上げ住宅に移り住むことになったのは夏から。現在でも住民の多数はいわき市と会津美里町にある仮設住宅に住んでいます。いわき市は警戒区域から避難してきた人たちであふれ、賃貸住居が不足しているため、仮設住宅から転居できない状況だといえます。2012年8月10日、檜葉は警戒区域から警戒区域解除準備区域になり日中の立ち入りは可能になりましたが、今でも夜間はとどまることができません。

## ● 1年間の休校

檜葉北小学校、檜葉南小学校、そして檜葉中学校で学んでいた檜葉っ子たちは、原発震災で学校が休校となり、住んでいる仮設住宅や借り上げ住宅近くの学校に通うことになりました。1年後の2012年4月、銭田工業団地の空き工場に檜葉小・中学校の湯本仮校舎が開設され、いわき市全域に散らばって住んでいる檜葉っ子はスクールバスで通学することになりました。遠いところからは1時間かけての通学です。同時に町はいわき明星大学敷地の森林を切り開き、プレハブの中央台仮校舎が建設をスタートしました。グラウンドは表土をはぎ除染をおこない、線量を0.1マイクロシーベルト前後にしました。この仮校舎には、小学校が1階、中学校が2階に教室をおき、別棟には就学前の園児が通うあおぞらこども園も併設され、2012年12月に引越しをしました。

しかしながら、檜葉小・中学校に通学する檜葉っ子の数は激減しました。2013年度の檜葉中の全生徒数は63人、檜葉南・北小学校の全生徒数は88人、いずれも3・11以前の五分之一です。学校再開まで1年間の空白があり、すでに通学している学校になじんでしまっていること、スクールバスによる通学時間がかかることなどが理由のようです。二つの小学校は一緒の教室で授業をしています。校長先生は2人、学級担任も2人いて、授業は交代でおこなっているそうです。

## ● 町のこれから

檜葉町は福島県、復興庁とともに復興計画をたてています。檜葉の道路や下水道のインフラはほぼ復旧しました。他の地域に比較して放射線量が低いこともあり、国はこの地域を重点的に除染する地域の一つと指定して2012年夏より除染を開始し、現在、建物、道路、農地の除染がほぼ終了しました。ちなみに、檜葉町の数十の公共施設に設置されているモニタリングの計測に依拠すれば、ホットスポットを除外した1年間の積算線量は1~2ミリシーベルトと報告されています。2014年4月に檜葉町は帰還をどうするか判断をするそうですが、問題は山積しています。

現在、檜葉の人たちは、福島県内に6300人（いわき市に5300人、会津地方に600人）が居住。県外では関東地方が1000人と大半をしめ、東京には200人、神奈川には90人が住んでいます。檜葉町と復興庁は繰り返し、全世帯（3700世帯）を対象にアンケートを実施していますが、2014年1月に実施されたアンケート（回収率60%）では、帰還が決まれば「檜葉町にすぐ帰る」8%、「条件が整えば戻る」32.2%、「今は判断できない」34.7%、「檜葉町には戻らない」24.2%という結果がでました。コントロールできていない原発の安全性、除染の効果への疑問、放射線が子どもの健康に与える影響などを考え、子どもがいる親や若い世代の多くは帰還をあきらめています。帰還を望んでいる町民も病院や福祉サービス、インフラの整備、傷んだ家の修理やねずみやイノシシの害など心配はたえません。

さらに大きな問題があります。現在、国から支給されている一人につき10万円（1ヵ月）の支援金が、町が帰還を決めた後1年間で打ち切られてしまうのです。隣接する川内村や広野町は、すでに帰還をしましたが、帰還した住民は2割弱。帰還を望まない、あるいは帰還したくても家を修復できない等の理由で帰還できない人たちは、支援金を打ち切られ厳しい生活を強いられています。

## ● 檜葉っ子たちは

檜葉小・中学校は、町が今年4月に帰還を決めれば、来年4月に檜葉の地にもどることを予定。檜葉中学校は、2015年3月までの完成をめざして新校舎の建設が進められています。北・南小学校は、生徒数が激減することが予想されるので合併し、地震の被害がすくなく南小学校の校舎を使用するように協議中だそうです。檜葉町教育委員会は、何人の生徒が帰還後の檜葉小中学校で学ぶのか意向調査を繰り返していますが、調査を重ねるごとに帰らないという割合が増えています。

子どもたちは帰還するかどうかは自分では決められません。そして、帰還を決定する家族はそれぞれの事情をかかえています。今後、どのように檜葉っ子に寄り添っていくのか、ささやかな私たちのプログラムを通して考えていけたらと思います。

## いわきを訪ねて

事務局 小山千鶴子

3月6、7日いわき市を訪ねました。(遠野、小山)

いわき市に仮設の檜葉中学校に行き、玉澤校長先生と会いました。三年生の高校進学見通しは大丈夫でしょうと明るい予想。それも常に倍する先生の陣容と熱意で、生徒さんたちに学習習慣がついてきたなど実感されている由。横田鮎果さんは、作文コンクールに応募し、選ばれて春休みにドイツに行くことになりました。脱原発にどんな取り組みをしているのかを学びたいという希望があったのです。成長してゆくことは素晴らしいことですね。

玉澤校長先生とは私も参加した11月の文化祭・ゆづり葉祭のことでもはなしがはずみしました。今年巣立つ3年生は、3.11後は入学式どころではなく、散り散りに過ごし、2年生でやっと仮校舎に集まるも、ざわざわと落ち着かない日々もあったことでしょう。3年生で初めての文化祭に、張り切って下級生をまとめあげたのです。地域の方々に伝統の和太鼓を教えて頂き、ばちさばきをそろえる猛練習が実り、汗の飛び散る大熱演となりました。逆境を跳ね返してゆくエネルギーを皆蓄えてきたのだなと思いました。他の演目では、色々な職業体験のレポートをコントで表現するとか、合唱、そーらん節踊り先生方のアマちゃんダンス等、多彩で楽しく大いに盛り上がりました。

さて、校庭では部活の生徒たちが揃って準備運動していましたが、元気よく挨拶してくれました。プランターには色とりどりのパンジー。OBの方が植えてくださったと。学校は地域の拠り所ですし、幼児の為の施設も隣にあり、徒歩圏内には檜葉町仮設住宅が数多く建てられています。同じ地区に檜葉町役場もあり、成人式には百人近くが着飾ってお祝いされたとのこと。なでしこサッカーの田中陽子さんも檜葉中学校出身なので、出席しました。

翌日の訪問先は檜葉町教育長さんで2月に新任です。以前檜葉中学校校長さんでした。こらっせの活動を紹介しますと、お世話になったのですねと感謝して頂きました。参加する大学生と生徒さんたちの双方向に、よい影響があるのではとの評価。同行してくださった檜葉町民の伊藤さんともお知り合いで、自らの頭で判断し、決断や実行のできる人間になってもらいたいですねと話がはずみしました。時間を作って4月27日の”空の家“での交流会に参加できたらとの発言も。檜葉町の除染後、檜葉中学校を新築する計画があり、更には他の町と合同の高校も構想中。国際的視野を持って、魅力ある教育拠点を作ってゆきたいと話されていました。

私(小山)は檜葉町を訪問したことはありませんが、美しい自然の中で暮らした共同の思い出は大切でしょうし、そのルーツを忘れないでとの思いもわかります。これから一筋縄にはゆかないでしょうが、新しい町の再生をどう形造るか、子供たち自身が未来を考える力をきつと持ってくれるだろうなと希望を持っています。

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」  
TEL : 045-353-9008 FAX : 045-353-9998  
Eメール : info@korasse-kanagawa.org